

SESSION 1 概要

著者	松田 利彦
雑誌名	世界の日本研究
巻	2005
ページ	33-34
発行年	2006-08-01
その他の言語のタイトル	SESSION 1 Summary
特集号タイトル	在外コリアンのディアスポラと国際ネットワーク戦略 The Korean Diaspora and Strategies for Global Networks
URL	http://doi.org/10.15055/00003776

概要

セッション1では以下の報告が行われた。イアン・スコガード「語るディアスポラ：異文化間の比較」は、まず、ディアスポラ個々の差異をどのようにモデル化するかという問題に対して、Voigt-Gratの理論に従って、「文化的淵源」「ディアスポラの結節点」「新たな中心点」「移民の流れ」「国境を越えた人口移動」などのタームを用い、アルメニアン・ディアスポラとコリアン・ディアスポラのマッピングを行った。そして、ディアスポラ間の差異を認識することがまさにディアスポラとしての自意識を生み出すとして、コリアン・ディアスポラのケースについて「アンニョン・キムチ」という映画に現れたアイデンティティの葛藤を通じて説明を行った。

エドワード・チャン「コリアン・ディアスポラとアジア系米国人の理論的再検討」は、アジア系米国人研究の一環として行われてきた初期（1960年代）のコリア系米国人研究の枠組みの克服を提唱した。グローバリゼーションの進行しつつある今日、コリア系米国人の研究は、世界各国の事例を考慮した「ディアスポラ」の視角を備えなければ成立しがたくなった。このようなパラダイムのシフトはコリア系米国人研究のコリアンスタディーズへの接近も不可避的にもたらすと論ずる。

チャールズ・リリー「米国におけるコリアン・ディアスポラとセネガル人ディアスポラ—アイデンティティ形成における宗教の役割」は、20世紀初頭に形成されはじめた米国における朝鮮人のディアスポラと1920年代にハーレムに移民したセネガル人のディアスポラを比較対照した試みである。両移民集団のバックボーンには、コリアンの東学、セネガル人のイスラム教という民族主義的・反帝国主義的宗教が存在していた。しかし、コリアン・ディアスポラでは東学は衰退し、プロテスタントイズムが根を下ろし、ひいてはそのことがホスト社会と同化する条件を与え、居住地域の郊外への拡大をもたらしたのに対し、セネガル人ディアスポラの場合はムスリムとしてのアイデンティティを保持していたが故にホスト社会ではマイノリティーとしての位置にとどまり都市居住からの広がりも持たなかった、とされる。

尹麟鎮「グローバルな観点から見たコリアン・ディアスポラ」は、在外コリアンの既存研究が各地域ごとの個別研究に偏ってきたことを指摘した上で、米国・中国・日本・ロシア・カナダを共通の変数を通じて分析しようとした。その結果、もちろん程度の差はあるが、社会的差別を受けにくい都市部での商業に従事する傾向が強いこと、子弟の教育への投資に熱心であること、エスニックアイデンティティが比較的維持されていることなどの点で、各コリアンディアスポラに共通する適応過程を抽出した。

以上の四報告は、いずれも個別の地域のコリアン・ディアスポラに着目するよりは、地球的規模でそれらを比較対照しようという問題意識に貫かれている。グローバリゼーションの進行の中で個別の地域研究を超えたフレームワークを提出しようとし、そのための理論的ツールがまさに「ディアスポラ」という概念であることを確認した。ただ、各報告に対する質問ではしばしば、どのような基準をもって比較を行うのか、選択された基準の客観性は保証されているのかといった点が論点となった。ディアスポラという概念の可能性とその実際の操作上の課題をあわせて示したセッションとなったといえるだろう。

(松田利彦)